

第12回「日本語大賞」

テーマ「私を動かした言葉」

高校生の部 優秀賞 受賞作品

「まっさらな明日へ」

東京都
東京都立三鷹中等教育学校
四年 田島 梓彩

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

「明日がまだ何も失敗のない新しい日だと思うと、嬉しくならない？」

一日の中でなにか一つでも間違えてしまうと気分が落ち込み、明日もきつと同じような失敗を繰り返すのだろうかと思ってしまう。ネガティブな性格だった小学生の頃の自分に、この言葉は明るく問いかけてくれた。

この言葉は、「赤毛のアン」の主人公であるアンが口にしたものだ。カナダの小説家ルーシー・モード・モンゴメリによって書かれたこの小説は、さまざまな言葉に翻訳され世界中で愛されている。舞台は、カナダにあるプリンス・エドワード島。マシューとマリラの兄妹は農作業の手伝いをさせるために孤児院から男の子を引き取ろうとしたが、やってきたのは十一歳の少女・アンだった。アンは強気で頑固な性格で、自分の赤髪をからかったクラスメートを石板で殴ったり友達にジュースと間違えてお酒をふるまっつて酔っぱらわせたりと様々なトラブルを起こしてしまう。そんなアンに、担任の先生はこう言葉をかける。「明日になれば、全てをやり直せる」。それに感銘を受けたアンがマリラに問いかけたのが、冒頭の言葉だ。

わたしがこの小説を初めて読んだのは、小学二年生のとき。アンの明るさとまっすぐな性格が、わたしには眩しかった。その頃の自分は内気で、自分の意見を人に伝えるのがとても苦手だった。言いたいことがあるのに口に出せないもどかしさを日々感じ、明日の自分もこのままなのかと思うと憂鬱な気分になっていた。そんなわたしにとって、数多くあるアンの前向きな言葉の中でひとときわ印象に残ったのがこの言葉だった。

明日はまだ、何も失敗していない日。言われてみれば、確かにその通りだ。明日のことは、誰にもわからない。失敗するかもしれないし、うまくいくかもしれない。「明日」という日への希望を謳う言葉は、日常の中でもよく見かける。しかし、アンの言葉は他にはないまっすぐな強さを持っているように感じる。それは、明日に過剰な期待をしていないという点から言えるだろう。

わたしがよく耳にする言葉には、「明日はきつといいことがある」という意味が含まれているように聞こえる。それはわたしたちに勇氣や希望を与えてくれるものだが、時に無責任に感じられることもある。明日はきつとまっすぐいから、自分からなにかする必要はない。そんな風に聞こえてしまう。だからわたしは誰かからこのような言葉をかけられても、素直に受け取ることができないでいた。

それに比べてアンの言葉は、明日はまだなにもないまっさらな日なのだと教えてくれる。確かにまだ失敗もしていないが、成功するという確証もない。樂觀的な響きを持つようにも感じられるが、それはどこまでもまっすぐな言葉だと思う。プラス方向にもマイナス方向にも傾かない、芯のある言葉。

それでもこの言葉がわたしを前向きな気持ちにさせてくれるのは、明日は自分の力でなんとでもできるのだということを感じさせてくれるからだ。明日は不確かな存在で、今日の自分ができることは何もないように思える。しかしそれは、逆にとらえると「今日」のわたしがなにか失敗してしまったとしても、「明日」の自分なら解決できるかもしれないという前向きな意味にもなる。未来を悲観してうつむきながら日々を過ごすのは、あまりにももったいない生き方だ。わたしは何もない明日に向かって前を向いて進むことができるはずだ、という力を与えてくれる。だから、わたしはこの言葉を思い浮かべるときに背筋が伸びるような心地を味わう。「赤毛のアン」を読んでから、わたしは卑屈な考え方をやめ物事を前向きに捉えられるようになった。

しかしどれだけ未来の自分に頼ったとしても、今日と明日は繋がっている。結局、行動するのは自分自身なのだ。だから明日をよりよい日にできるかどうかは、今日の自分にかかっている。そう思うと、たった今からすべきことがあるのだという気持ちになる。

明日のわたしのために、今日の自分ができること。「明日はまだ、なにも失敗のない新しい日」。わたしはいつも、この言葉に背中を押され続けている。さあ、明日のために今日は何をしよう？